

親が子を愛するのは自然の本能かもしれないが、子供が親に孝行するのは、人工的努力が要り、まして妻が夫に献身するのは、人為的努力が要る。してみると女は窮極のところ、エサを運ぶことにしか、男の価値をみとめていない、これがごく自然な姿なのかもしれない。仲のいい夫と妻もいるとはいえ、そういう人々はどこか二十四孝(にじゅうしこう)のお手本の顔と共通している。人間本能上、何らかの無理をしているのかもしれない。  
「その無理というのが、人類の教養かもしれまへんなあ」

思いやりや人を喜ばせてやろうという気持、それが、人間の教養あるしるしではないかと思った。夫は一流の学校を出て知識人と思われ、いい会社に勤め、とりあえず人に出世したと思われて、人生は成功したようにみえるかもしれないが、かんじんの、いちばん身近にいる妻をさえ、心楽しませることをしないのだ。  
そんな男が、なんのインテリ、なんの教養人であろう。  
人生でいちばん大切にしないといけない人間に、どう思われているかということさえ分らないとは、何というぼんくらであろう。

やさしくない対極は、好奇心がやたら強い人。好奇心は人間にとっていつの場合もわりかしいい点を与えられる素質の一つだけれども、発現方法によっては人を卑しくします。好奇心の強い人は冷たいときがありますね。自分のための好奇心ですから、相手のことは考えないからでしょう。

自分を客観視できぬような人間が、なんで他者を洞察できよう。  
女であることにいじけていて、また、人間としていじけていて、なんで男の人間性を把握できよう。  
男のよさやかawaiiげを賞翫(しょうがん；ほめて味わうこと)できるにはオトナの女であること。これは女の人生キャリアにもより、また習練にもより、発想の転換にもよる。名馬も伯楽(はくらく)あつてのもので、男のかわいげをみつけ出し、それを楽しむためには、まず女が自分自身を確立していなければいけない。  
それが大前提である。  
自分がかわいがってもらふことばかり考えているような幼稚未熟な女、人格未発達な女は、まずダメ。  
いつも自分がソンを見る、自分が辛抱していると考えてるいじけた女もダメ。  
そういう女たちは、男と暮らす面白さをこの世で十分に味わいつくせないで、不平不湖で一生を送ることになる。

女には被害者意識の強い人が多いが、なぜそうなるかという、ひとえに物おぼえがよすぎるからである。  
自分が他人を傷つけたことは忘れるくせに、他人に傷つけられたことは忘れない、そういう女がよくあるので、困ったもの。  
女の定義。  
「女とは許すことはできても、忘れることはできぬ動物なり」

女性の幸福感というのは、それだけで独り立ちしないからである。緘黙(かんもく)のうちにじっくり幸福の美味をたのしみ、味わう、ということが、私たちオンナ族にできにくいのは、幸福の解釈による。  
(独りで楽しんでいるだけの幸福なんて、ホンモノじゃない)  
と思う女たちが多いのだ。周囲に誇示し挑発し、羨望や嫉妬の波紋をたしかめ、優越感を味わってやっと「幸福」は完結する。

人によっては、女に生まれてソンだという。

果てしない煩雑な家事、乏しい家計のやりくりの辛さ、育児の心労を訴える。

しかし、そういう人は、男に生まれても、また、男の辛苦を訴えるのだ。そして女は楽なものだ、と女を非難し、おとしめるようにできているのだ。

「女は男を叱咤激励すんの、好きやね。あれが女の本質やな。叱咤激励、いうの。校長みたいな気イでおんねんな。あれ、いややさかい、結婚しまへんねん」

伝統的にニッポン男児は、女性への理解力が乏しい。女を女として見ない。女は二種類しかないと思っている男が多い。

つまり、母親か、しからずんば、単なる性的対象である。

妻という存在があることすら思いも及ばずに、一生をすごして死んでゆく男が多い。

これは妻を、母親代用に使っているのである。

やさしくだけしてくどかない男、なんてウソツバチである。どこか不自然である。私の経験では男はみな、そうであった。

話が合うなあ、と思うと、やっぱり、くどいてきた。

趣味が合うなあ、と思うと、やっぱりくどいた。感じいいなあ、と思うと、くどく。

ついに私は、男って、ソレぬきに話や趣味が合うのは、いないんじゃないかとさえ思えてきた。もちろん、私はいちいちおつき合えるわけじゃないので、つつしんでご辞退したのであった。

すると男たちは急に話が合わなくなり、趣味が合わなくなり、感じが悪くなるわけである。

つまり要するに男たちは、くどくときには女と話が合うのであった。だからくどかれても OK といわない女に、べつに話を合せる必要はないわけである。

「夫と妻というのは鞍馬天狗と杉作ね。背中合わせになって前にいる敵、後ろの敵と戦ってるから、内輪でケンカなんかしてられないわ」

夜と朝しか、顔を合せられない家族だけれど、顔が合うと、みんな、今日一日のできごとをわれがちにしゃべらずにはいられない、家、というのは、外で何かあると、(早く帰ってこのことをしゃべろう！)

と走って帰る先が、人間の家というものだと思うものだ。

オトナ(中年)というのは、じーっとそこにいるだけでも(男女を問わず)臭いものであるのだ(生物的に、ではない)。説教臭、自慢臭、ヒガミ臭、イバリ臭。

高砂の翁と姫

- ・高砂とは、人生で何事があっても、人は元の姿に必ず戻っていく(つまり、めでたいところに納まる)という意味をあらわします。
- ・結婚式で高砂とは新郎新婦のいらっしゃる場所のことです。

男性は、本来、性・劣悪なる者が多く、馬齢を重ねてなお、社交や対人関係にまずい人が多い。

そして、いい年をしてすぐ顔色に出してムツとしたり、朝から部下に当たり散らしたり、調子にのると浮かれ騒いだりして、若い人の軽蔑を買っている。

あるいはぶっきらぼうで手持ちぶさたに、面壁のダルマさんの如く、客を前にして一時間も苦悶して黙りこんでいる口下手もある。

そういう男どもの分も引きうけて、中年婦人は饒舌やウソで人生をうまく動かしている。

長生きなんて元々、楽しくないものなのだ。古馴染みの次々欠けていくのを見るのが長生きなのだから。

さればこそ、順番が来るまでの時間を楽しく、じっくりと心ゆくまで味わい、その楽しみを周りにもふりわけて、「夢うつつ」で過ごせばよいのだ。

(長生きしたなあ……)

と自分で思ってしまうと、

(長生きして何が嬉しかろう?ちっとも楽しいことはないではないか)

などという、やくたいもない省察が生まれてくる。それゆえ、長生きした、なんて自分で考える間もないように、日々忙しく、日々楽しく、

「夢うつつ」

でとび跳ねて過ごしていればよいのだ。

人間がいちばん力を出せるのは、三十代後半から四十代いっぱいではないかと思うのだが、しかしその反面、力を出しきって「ぶっつん」と切れるのも、その年代であるようである。

人生はワキ目もふらず歩いたり、やみくもに走ったりするものだ、と思いきこんでる人が多い。目的地に向かっていっしんにセッセと、あるいはトボトボと歩きつづけるものだ、と思いきこんでる人が多い。

ちやうねん。

ときどき片足で飛んだり、小石を蹴ったりして遊ばないと、長い道程、身が保たない。

愛して、愛されて、楽しんで、そして命の終るとき、棺の中へはいりながら、

「アア、楽しかった!」

といえるような人生を、私は送りたいと思っている。生き残る人に、シッケイ!と手をあげて、

「楽しかったね」

と握手して、またね、といえるような人生でありたいな、などと空想する。

陰気、というのは伝染るものである。

なるっただけ、陽気な人のそばにいるほうがいい。陽気も伝染るのだ。

そしてこれから先の世の中、陽気でないと、もうやっていけないのだ。

「ハレ」; あらたまった正式の、たとえばお祭や格調たかき場合

「ケ」; 日常次元、普通の場合